

奈文研

ニュース

No.58

sep.2015

NABUNKEN NEWS



独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577奈良市佐紀町247番1
<http://www.nabunken.go.jp>

飛鳥寺出土文字瓦の調査

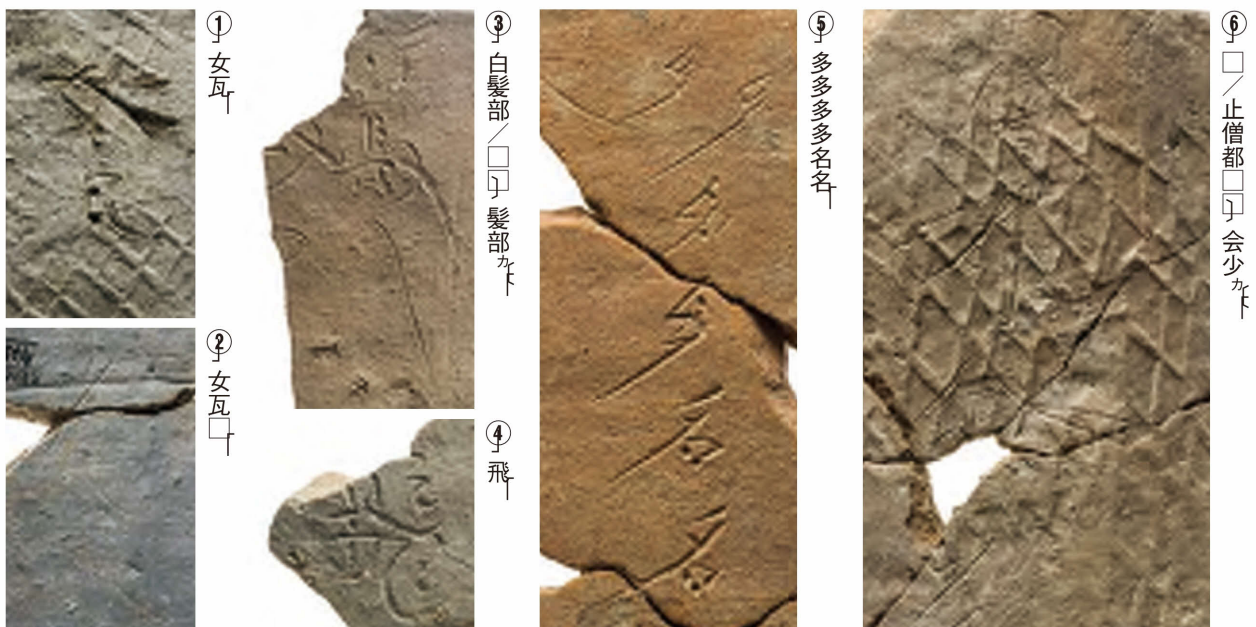
飛鳥寺は崇峻天皇元年(588)創建の日本初の本格的寺院として知られています。その瓦生産については、百濟から「瓦博士」が、そのほかの寺院造営技術者とともに派遣されたことが記録に残ること、および実際に飛鳥寺から出土する瓦が百濟のものと同様であることから、百濟の瓦工人の深い関与が確認されています。

飛鳥寺の発掘調査は、1956年および1957年の中心伽藍の調査以降、奈良文化財研究所が継続的に進めてきました。これまでの調査では大量の瓦が出土しており、ヘラ描き文字瓦(以下、文字瓦)の出土も報告されていました。こうした既報告の文字瓦のうちの数点について、東野治之氏(奈良大学文学部教授)が積読の可能性を指摘され、未報告のものも合わせて、東野氏、狭川真一氏(公益財団法人元興寺文化財研究所)とともに考古第三研究室、史料研究室が再調査をおこないました。このうち主なものを紹介します。

①・②は、平瓦凸面に平瓦を指す「^{めがわら}女瓦」の文字を

刻んでいます。瓦はいずれも7世紀後半のものと考えられ、「女瓦」と記した最古級の文字資料と位置づけられます。このうち②は、川原寺創建期の平瓦と同じ特徴を持っており、川原寺から飛鳥寺へ瓦が持ち込まれた可能性も考えられます。③は、平瓦凸面に「白髪部」と刻んでいます。これは、瓦生産に関わった工人の集団名または氏族名とも推定されます。④は、平瓦凸面に「飛」と刻しており、飛鳥や飛鳥寺などを意味した可能性があります。⑤は、平瓦凸面に「多々々々名名」と刻む習書(文字の練習)です。⑥は、平瓦凸面に刻まれた文字の一部が「僧都」とすれば、僧尼を管理する僧綱の一つを指す可能性があります。

これらの瓦のうち、①、②、③、⑥は7世紀後半ないしそれ以降のものと考えられます。飛鳥寺の補修等の際に製作され、用いられたものと判断されます。いっぽう、④、⑤については、断定しがたいものの飛鳥寺創建期にさかのぼるものである可能性も考えられます。瓦生産が開始されたごく初期の段階から、瓦に文字を記す行為があったことが知られ、興味深い資料です。(都城発掘調査部 清野 孝之)



飛鳥寺出土文字瓦